様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21　年 5　月 20　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007　～　2008
課題番号：19720078
研究課題名（和文）　昭和モダンの生成にみる文化翻訳のポリティクス

研究課題名（英文）Japanese Modernism and the Politics of Translation between Cultures, 1920-1930s

研究代表者 波潟　剛（NAMIGATA TSUYOSHI）
九州大学大学院比較社会文化研究院　准教授
研究者番号：10432882

研究成果の概要：1920 年代から 1930 年代に刊行された辞書類や文芸雑誌等での「エロ」「グロ」「ナンセンス」といった語彙のあらわれ方を分析した。その結果、東アジアにおいてモダニズムが生成する際の相互関係の重要性が明らかになり、欧米からの文化翻訳に加えて、東アジア間の文化翻訳について研究する必要性があることを指摘した。また、日本のモダニズム文学とスポーツとの関わりについても今後検討課題となりうる資料を見つけ分析を加えた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,000,000	270,000	2,270,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学：各国文学・文学論
キーワード：比較文学、日本文学、モダニズム、昭和、翻訳、文化

１．研究開始当初の背景

(1)本研究では、1920 年代後半から 1930 年代前半にいたる「昭和モダン」の生成に注目し、文学・芸術運動のみならず、映画や音楽あるいはファッションや生活習慣をふくむ幅広い研究領域におけるモダニズム研究の成果をふまえて新たな視点を見いだそうとした。

(2)というのも、1990 年代以降、モダニズムに関する領域横断的な研究が進んでいることが背景にある。たとえば、岩本憲児編著『日本映画とモダニズム　1920－1930』（リブロポート、1991 年）、鈴木貞美『モダン都市の表現――自己・幻想・女性』（白地社、1992 年）、和田博文『テクストの交通学――映像のモダン都市』（白地社、1992 年）、初田亨『カフェーと喫茶店　モダン都市のたまり場』（ＩＮＡＸ出版、1993 年）、秋田昌美『性の猟奇モダン　日本変態研究往来』（青弓社、1994 年）、澤正宏共編『都市モダニズムの奔流　「詩と詩論」のレスプリヌーボー』（翰林書房、1996 年）、馬場伸彦『周縁のモダニズム　モダン都市名古屋のコラージュ』（人間社、1997 年）、図録『モボ・モガ展 1910-1935』（神奈川県立近代美術館、1998 年）、渡辺裕『日本文化・モダン・ラプソディ』（春秋社、2002 年）、川畑直道『紙上のモダニズ

ム　1920－30 年代日本のグラフィック・デザイン』(六曜社、2003 年)、橋爪紳也『モダニズムのニッポン』(角川選書、2006 年)、竹内民郎共編『関西モダニズム再考』(思文閣出版、2007 年)、ミツヨ・ワダ・マルシアーノ『ニッポン・モダン　日本映画 1920・1930 年代』(名古屋大学出版会、2009 年) など、諸分野において「モダニズム」の見直し作業が進められている。したがって、文学における「モダニズム」の再評価は、美術史、映画史、社会学、メディア論、歴史学などの成果と歩調をともにしてきたといえる。

(3)このように再評価が活発化するなかで、「モダニズム」という概念そのもの、あるいは「モダニズム」の生成にともなって発生、流通した概念に関する見直しも行われている。日本の場合も、欧米と同様「モダニズム」の時期や内容は諸説あるが、本研究が注目するのは「モダン」という語が流行した昭和初期である。またその時代を代表する「エロ・グロ・ナンセンス」という概念は、日本の「モダニズム」について考える格好の視座となる点で重要だと考えた。ミリアム・シルババーグの論文「エロ・グロ・ナンセンスの時代――日本のモダン・タイムス――」(『岩波講座　近代日本の文化史　七　総力戦下の知と制度』(岩波書店、2002 年) は、「エロ」、「グロ」、「ナンセンス」の三要素を以下のように定義している。まず、「エロ」は「性的に乱れた議論や、女性の (時には男性の) 体の線」を指すばかりでなく、「多様な官能的満足や身体的表現性、社会的親密さの肯定」をも意味する。そして、「グロ」は「奇形の、あるいは卑猥な犯罪性と結びついていたが、」「社会的不平等、およびそこから発生する、不景気によって限界づけられた消費文化のなかで生きる人々の社会的実践に結びつけ」られる。さらに、「ナンセンス」は「スラップ・スティック・コメディの魅力に対する省察」であるだけでなく、「欧米の習俗に支配されている近代性によってもたらされた変容、といったテーマを扱う、政治的なアイロニック・ユーモア」だとする (67～68 頁)。

(4)本研究もこうした動向と問題意識を共有するものであり、シルババーグの著書『エロティック・グロテスク・ナンセンス』(Miriam Silverberg. *Erotic, Grotesque, Nonsense: The Mass Culture of Japanese Modern Times*. Berkeley: University of California Press, 2006.) へと展開する考察に大いに示唆を受けている。だがその一方で、論の中心的話題となる「浅草」からさらに範囲を広げて検討を試みたいと考えた。というのも前掲『コレクション・モダン都市文化』で『エロ・グロ・ナンセンス』(第 15 巻、2005 年) の巻が登場し、考察の範囲を拡大する素材が提供されているばかりでなく、韓国でも『エロ・グロ・ナンセンス　近代的刺激の誕生』(ソ・レソプ著、サルリム出版社、2005 年、ソウル) という著書が刊行され、韓国における「エロ・グロ・ナンセンス」の受容が問題となっているからである。特に後者の存在は、すでに知られている上海モダンとの関係を視野に入れるとき、東アジアにおける「モダニズム」の交渉が問題となっていることを示す。すなわち、歴史的文脈に注目した場合、「エロ・グロ・ナンセンス」の生成過程における文化の政治学が、欧米文化の翻訳という側面ばかりでなく、東アジアにおける「モダニズム」の翻訳とどのような接点を持つのかが大きな問題として浮上するのである。

(5)したがって、先ほど列挙した著書や、モダニズム研究会『モダニズムの越境Ⅰ～Ⅲ』(人文書院、2002 年)、『岩波講座　近代日本の文化史　六　拡大するモダニティ』(岩波書店、2002 年)、五十殿利治・水沢勉編著『モダニズム/ナショナリズム　1930 年代日本の芸術』(せりか書房、2003 三年)、科学研究費補助金研究成果報告書『東アジアにおける植民地的近代とモダンガール』(研究代表者舘かおる、20007 年) などに導入されているポスト・コロニアル理論の視座が、「エロ・グロ・ナンセンス」についても有効となるだろうと考えた。

２．研究の目的

(1)「昭和モダン」を特徴づける用語である「エロ・グロ・ナンセンス」がどのように発生し、定着したかを明らかにする。

(2) 「昭和モダン」現象が他の東アジア地域における「モダニズム」の動向とどのように関わり、互いにどのような文化翻訳がなされていたのかを明らかにする。

(3)さらに、文学におけるモダニズムと他の研究領域との接点を模索する。

３．研究の方法

(1)『モダン語辞典』『モダン用語辞典』『サンデー毎日』『週刊朝日』『文学時代』『近代生活』などの国内誌や、上海の日本語新聞『上海毎日新聞』『上海日日新聞』『上海日報』、韓国の文芸誌『新民』『別乾坤』『新女性』『新東亜』などから、モダン関連項目を抽出した。

(2) 分析にあたっては、レイ・チョウ『プリミティヴへの情熱　中国・女性・映画』（本橋哲也・吉原ゆかり訳、青土社、1999 年）において、文学者魯迅に関するエピソードから、中国における「近代」の始まりを、映画という視覚メディアの衝撃と、文化の危機に生じる「原初への情熱」によって記述する第一部の議論と、「モダニズム」と「プリミティヴィズム」の共犯関係から議論を発して、ポストコロニアル世界における「文化翻訳」の可能性を探る第三部の論考を参考にした。そのなかでも、「文化翻訳は、ある特定の言語もしくは表象の型には統合不可能であるような様々な記号システムを展開する多様な社会グループ間の共時的な交流と闘争」（292 頁）という定義を議論の前提とした。

(3) 1930 年代からモダニズム文学と「スポーツ」との接点が顕著となるため、代表的なスポーツグラフ誌であった『アサヒ・スポーツ』における小説欄の全体像を明らかにした。

４．研究成果

(1) 従来の指摘にあるように、日本では 1930 年に「エロ・グロ・ナンセンス」の流行が起こる。その際、欧米の「モダン」な文化を、日本では「エロ・グロ・ナンセンス」として翻訳していったのは、そもそも欧米の「モダン」にそうした要素があったからであって、さまざまなグループが介入しつつ露骨に示して見せた結果だといえる。だが、たんに模倣によってオリジナルの性質を浮き彫りにしたことだけが問題ではない。混沌としているように見える「感覚的刺激」のオンパレードが人種/民族の思想性をともなっていることも重要であり、今後は、「大衆」に提示され、「生活哲学」として享受された文化の論理が、戦争の時代へ、総動員体制の時代へとどのように引き継がれたのかという問いを立てる必要があるという見解に至った。

(2) 風俗文化として理解される「エロ・グロ・ナンセンス」に注目することによって、「昭和モダン」、そして教義の「モダニズム」の考察が、活字メディアと映像メディア、知識人と大衆、美学と政治学との関係を問い直す作業へと接続する可能性を秘めていることが明らかとなった。

(3) 「昭和モダン」の生成は、上海モダン、そしてソウルにおけるモダニズム現象とも密接な関係にあった。しかし、日本と中国、日本と韓国にとどまらない広がりがあり得ることが明らかとなった。李光鎬編『韓国の近現代文学』（尹相仁・渡辺直紀訳、法政大学出版局、2001 年）に収録された金允植の論文「韓国文学の二つの指向性の弁証法」（初出は『月刊文学』1974 年 2 月）に、「1920 年代の韓国で『モダン（毛断）ガール』なる言葉が流行したことがある」（27 頁）という記述がある。十分な量の用例を確認してはいないが、崔貞熙「尼奈の三幕の記録」（『新女性』1931 年 12 月）には「モーダン（毛断）」と書かれている箇所がある（101 頁）。これは岸田劉生が 1927 年に「毛断嬢」と名づけたことを契機としているが、陳芳明『植民地摩登現代性と台湾史観』（麦田出版、2004 年、台北）によれば、1930 年代、「毛断」の語が台湾でも流通していたという（13 頁）。そうなると韓国と台湾の「モダン」について比較するという視野も開けてくる。また、上海モダンを指す際にしばしば使用されている「摩登」との関係はどのような位置にあったのかという課題も生じた。

(4) 文化翻訳の複雑な網目を検証していくことは、〈日本人〉というナショナル・アイデンティティそのものの見直しにも接続する。当時の〈日本人〉という枠組みには現在の韓国・北朝鮮ならびに台湾の人々が含まれていた。そこで語られるナショナル・アイデンティティは、東アジアにおける文化的・政治的な葛藤と調停によって成立する。では「モダン」をめぐるさまざまな文化的越境を経由したという前提に立つとき、一九三〇年代半ばから顕著となる「日本回帰」の議論はいかなる意義を持ちうるのかという疑問も生じる。これは、遠藤不比人共編『転回するモダン――イギリス戦間期の文化と文学』（研究社、2008 年）で取り上げられている「『イングランド』ないしは『イングリッシュネス』という表象への固着が支配的（かつ症候的）な『三十年代』のイデオロギー的オブセッション――『拡大する帝国』から自国文化へと退行する傾向」とも重なる問題である（「はじめに」vii 頁）。以上の点を確認するなかで、本研究の取り組む分野は、今後、さまざまな分野との共同研究の重要性がさらに増してくるという結論に至った。

(5) また、雑誌『アサヒ・スポーツ』の小説欄では 1932 年に掲載された山上雷鳥「スポーツ小説　招かれた客」を皮切りに「スポーツ小説」と銘打つ記事が登場した。そして 1933 年には、創刊 10 周年で懸賞「スポーツ小説」を応募し、受賞作を断続的に掲載していた。さらに 1936 年 1 月以降、小説欄が常設され 1942 年 1 月までの間に、サトウ・ハローや辰野九紫をはじめとする作家によって執筆された 120 編近い「スポーツ小説」が掲載されていることが分かった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①波潟剛、「昭和モダンと文化翻訳」、九大日文、13 号、2009 年、査読有、47-63 頁

②波潟剛、「雑誌『アサヒ・スポーツ』の小説欄（下）――「鍛錬」の時代へ――」、九大日文、12 号、2008 年、査読有、21-28 頁

③波潟剛、「雑誌『アサヒ・スポーツ』の小説欄（上）――スポ根、ユーモア、そして戦争――」、九大日文、11 号、2008 年、査読有 42-51 頁

〔その他〕
ホームページ等
①②③の論文はすべて、以下に記す九州大学の研究者情報から参照できるようにする。とくに①については、ハングル、簡体字、繁体字でも読めるように翻訳を付する予定である。

http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K002982/thesisList.html

６．研究組織
(1)研究代表者
波潟　剛（NAMIGATA TSUYOSHI）
九州大学・大学院比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：10432882